しが国際協力親善大使レポート

ほりい　だいすけ
堀井　大輔さん

隊次：２０１６年度３次隊

職種：生態調査

派遣国：パラオ

自己紹介

1988 年生まれ。柏原小・中学校→米原高校→広島大学→同大学院。大学院在学中にフィリピン大学大学院に交換留学。関東のコンサルタント会社に就職。環境コンサルタントとして、環境影響評価、再生可能エネルギー、震災関連等の業務に 2 年半従事。2016 年度 3 次隊としてパラオ共和国のコロール州政府に派遣される。職種は生態調査。活動の様子をブログにて発信中（https://shiitatoblog.wordpress.com/）。

活動している国、地域の気候や文化の紹介

パラオ共和国の国土は大津市より少し小さく、人口は約 2 万人、太平洋に位置する島国です。紫外線は日本真夏時の約 7 倍ですが、日陰は快適です。

同国は、歴史的背景から日本とアメリカの文化の影響を強く受けており、パラオ語にはの「シューカン」のように日本語起源の言葉が多くあります。例えば、日本語の「習慣」はそのまま「シューカン」と発音され、よく耳にします。印象的なのは、第一子が生まれた際のお祝いやお葬式などの行事を「シューカン」と呼ぶことです。余談ですが、こうした冠婚葬祭では、関係者がお金を寄付するため、その出費が悩みの種になっている人が多い印象です。

活動や生活について

2016 年度 3 次隊として 2017 年 1 月からパラオ共和国に生態調査の職種で派遣されています。世界遺産ロックアイランド（石灰岩の侵食によってできた島々）を管轄する同国のコロール州政府において活動しています。世界遺産に登録される 2012 年以前から国内外の組織によってロックアイランドの様々な調査が行われてきました。配属先もそれら調査に同行する機会は多いですが、配属先が自ら調査を計画することは技術的に困難でした。配属先の上司からは、配属先によるロックアイランドにおける長期的な生態調査（モニタリング調査）の計画、実施、及びそれらのデータベースの構築を依頼されています。

次の 4 つの観点から調査対象の絞り込みを行いました。

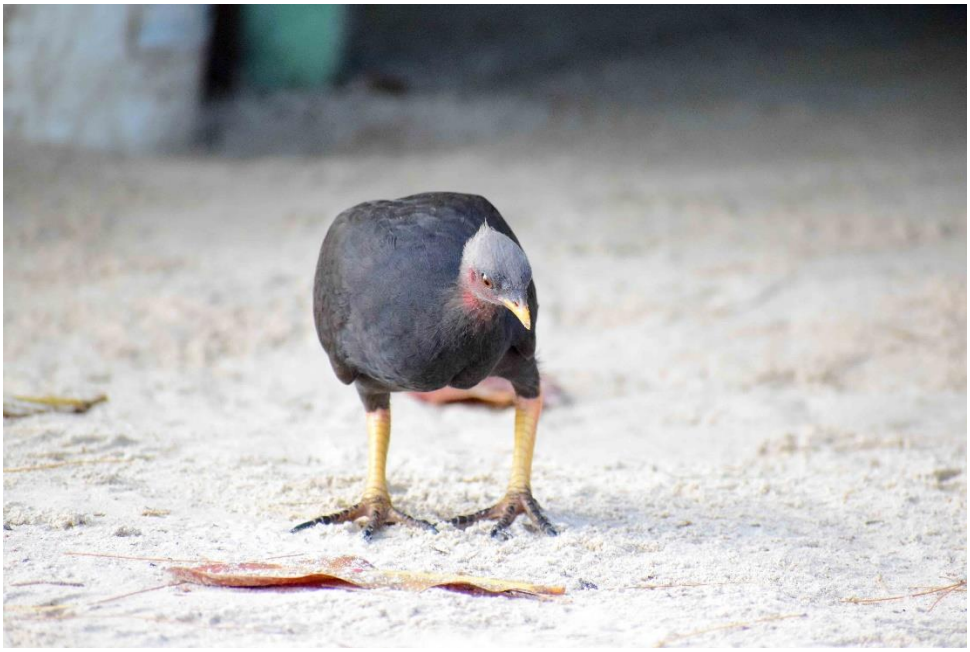
「①配属先が求める調査対象、②外部組織の調査内容と被らないこと、③配属先が単独で調査が可能な調査スペック、④外部組織ではなく配属先がモニタリング調査を行う意義が見出せる調査内容」

これらを踏まえ、調査計画案が既に存在していたロックアイランドにおける鳥類の月例モニタリング調査の実施を提案しました。パラオにおける鳥類の調査は、パラオ国立博物館の専門家によって行われていました。ロックアイランドにおいても調査は行われていましたが、ロックアイランドへのアクセスにはボートが必要なため、定期的な調査は行われていませんでした。一方、配属先はボートを所有し、ロックアイランドの管理を毎日行っていました。アクセス面の強みを生かせるという点で、配属先がロックアイランドにおける鳥類のモニタリング調査を行う意義は十分にあると考えました。

当初、私は調査の補助者の立場をとりました。同僚の主体性に期待し、同僚にモニタリング調査のコーディネーターになってもらうように働きかけました。しかし、私の未熟さと同僚の関心の無さ等から、計画はほとんど進みませんでした。数ヶ月間そのような状況が続き、方向性に悩んでいた時、配属先の上司から私が主導して計画を進めるように言われ、私も成果を出したいという焦りがあったため、それを引き受けることにしました。その後は、同僚 5 名を対象に、前述の専門家の協力のもと調査に係わるトレーニングを 3 ヶ月間行い、2017 年 10 月から月例モニタリング調査を開始することができました。私のやり方は少々強引だったかもしれませんが、トレーニングや調査が実際に始まったことで、配属先全体がモニタリング調査にそれまで以上に関心を持つようになったと感じています。

本原稿の執筆時点での任期は残り約 1 年間です。現時点ではデータベースの管理も含め、私がモニタリング調査のコーディネーターを担っていますが、私の帰国後も配属先が調査を引き続き行えるように、残りの任期でノウハウを丁寧に伝えていきたいと考えています。

鳥類調査のトレーニングの様子。左が同僚、右が著者。著者が作成した種判別表を利用して、観察した種を説明しているところ。



マリアナツカツクリ（パラオ亜種）。IUCN のカテゴリーでは絶滅危惧種に指定されている。木の根元などに土を盛り、その中に卵を産む。土の温度によって卵を孵化させる習性がある。

第一子が生まれた時のお祝いの様子。参加者が、第一子を授かった女性（写真中央）の周りを音楽に合わせて踊りながらその女性にお金を渡しているところ。

お葬式にて提供する魚をホストファミリーの親族と一緒に調理しているところ。

ロックアイランドで行われた海洋の生態調査トレーニングに同僚と一緒に参加した時の様子。